実践報告

タイ人学習者のための「日本語通訳」のコースデザイン

―教育実践の視点から―

アサダーユット　チューシー

要　旨

日系企業の通訳者が求められる社会背景に応え、タイ人学習者のために、「日本語通訳」の科目を設けた。通訳の書籍を参考にして、通訳の種類が分かり、教えられるように、自分がまだ経験していない同時通訳を実践しておいた。著者のこれまでの通訳の経験から困難点を抽出した。それから、その困難点に対する対策項目を考え、またその対策項目を提供する授業内容を考えた。それでも、完璧な結果ではなかった。２年間の「実践」をしてから、学習者の授業評価を基にして少しずつ修正してきた。

キーワード

日本語通訳　コースデザイン　タイ人学習者　逐次通訳　同時通訳

１．はじめに

タイの社会背景を言えば、1990年代からは様々な日系企業、特に製造関係の中小企業がタイで多くの工場を設立してきた。経済危機があった1997年頃からでも、日本語通訳の人材が多く求められてきた。チュラーロンコーン大学のカリキュラムにはビジネス日本語はあったが、通訳者になるための養成コースはなかった。学生は一般の日本語を学んできたため、就職する際に、まさにゼロから通訳の技能を自分で身につけなければならないという状態だった。2000年代に入り、民間機関で社会人向けの通訳の有料研修がいくつか見られるようになった。

このような背景の影響を受け、大学の日本語専攻が国全体で20箇所以上開かれ、「通訳」の科目を設置する機関も見られるようになった。私が勤めているチュラーロンコーン大学では、2021年に、「日本語通訳」の授業を開講して５年目になった。

６年前に、カリキュラムの更新版を検討した際、タイの他の大学ではすでに「通訳」の科目がカリキュラムに入っていたため、この科目を入れる必要があると考え、入れることになった。もちろん、1998年に自分が大学を卒業してから日系企業の通訳を始めた頃は、通訳の授業がなかったので、全て自分で試行錯誤して身につけた。その大変さを実感したので、卒業する前にこのような授業を受けられていれば楽だっただろうとも思い、カリキュラムに入れたのである。自分で提案したので、責任を取って教えることになった。

2017年にサバティカルリーブしたので、初めての通訳の授業の開講は経験が豊富な現役の通訳者に頼んで、非常勤講師として教えてもらったが、2018年からは自分で教えることになった。あいにく、2018年に政府が定めた非常勤講師の仕事の分担の問題が起き、当

時、担当する科目が急に増えた。通常の２科目から４科目になり、４科目のうち、初めて教えるのが３科目だった。不幸なタイミングで通訳の授業の内容を考えることになった。

大学間の情報交換があまりない時代でもあったので、他の大学の「通訳」の授業の担当者に聞くこともなかったため、実際にどのように授業を進行させればよいか分からなかった。手元にあって参考にできるのは、Banchongmanee（2006）の日本語学習者向けの『通訳への近道』という本だけだった。私は通訳の仕事もしてきたので、通訳者がどのようなことに悩むのかは分かる。通訳は翻訳と異なり、翻訳に比べて正確さをそれほど求められていないが、初心者の通訳者にとってはかなり労力がかかるものである。通訳はその場でのコミュニケーションなので、大事なのはその通訳者の語彙の準備、基礎知識、精神状態と言語再生力であろう。それらの実践経験からコースデザインをしてみた。

２.「通訳」の指導の実践前

「通訳」の授業を設計する際に、２点のことをしなければならなかった。一つ目は、『通訳への近道』以外の通訳関係の参考書を調べることで、もう一つは、自分の通訳経験をモニターして、この授業に求められることを書き出すことである。

日本では「通訳」と検索すると、「通訳ガイド」の書籍が多く出てくる。ビジネス通訳の場合は、日・英通訳になる。タイ語は英語と語順が似ているため、SOVの日本語とSVOの英語の通訳の書籍は、語順による言語管理の点で参考になるのではないかと考え、参考にしてみた。最近、CD付きの書籍も多いので、音声教材の準備のためにも参考になる。これらの書籍からはまず、通訳の種類が、逐次通訳（Consecutive Interpreting）、同時通訳（Simultaneous Interpreting）、ウィスパーリング通訳（Whispering Interpreting）、サイト・トランスレーション（Sight Translation）に分かれることを知った。

一方、自分の通訳経験をモニターした。私の通訳経験とは、製造会社の通訳（逐次通訳）、記者会見の通訳（ウィスパーリング通訳）、研修・裁判所・商売交渉の通訳（逐次通訳）である。また、日本語を教えている時、テキストを読んですぐに文章の意味をタイ語で説明するプロセスはサイト・トランスレーションという通訳の一種と見なすことができる。したがって、自分が経験していないのは同時通訳である。そこで、通訳者の大変さ及び克服方法を学習者に伝えられるように、授業が始まる前に、機会があれば、同時通訳も体験したいと思い始めた。その後、同時通訳の仕事をする機会があり、経験することができた。

次は、通訳という仕事で考えなければならないことを振り返って見ることである。次のように困難点を取り出した。

〈製造会社の通訳から〉

① タイの多くの日系企業は製造会社なので、製造会社では、文化系の分野を学習してきた人も理科系の語彙を身につけなければならない。

② 職業経験がないまま、職場の通訳になると、企業の根本的な仕事の流れ、仕事の分担、書類の基礎知識が足りず、困ることになる。

〈記者会見の通訳、研修の通訳、裁判所の通訳、商売交渉の通訳から〉

③ フリーランス通訳をする際は、顧客との打ち合わせも少ないため、顧客のビジネス

に関係する語彙を用意しておかなければ困ることになる。

④　フリーランス通訳をする際に、取引先から十分に情報を求めておかなければ、失敗の元になる。

〈記者会見の通訳から〉

⑤　公の場で通訳することは個別通訳とは違い、行動が制約されることがある。

〈同時通訳から〉

⑥　通訳する前に、よく使われそうな語彙をすぐに口から出てくるように練習しておかなければ、通訳する際に、いきなり思い出せなかったり、言葉が詰まってうまく言えなかったりする可能性もある。

⑦　通訳している際に、緊張感、精神的な状況と葛藤しなければならない。

⑧　通訳する前に、資料を準備しておかなければ失敗の元になる。

⑨　通訳対象者（原話者）の中には、通訳されることに慣れない人もいるため、スピードや話の区切りなどについて原話者と打ち合わせておかなければ失敗の元になる。

以上のことから、対策を考えて、その対策を指導項目にすることにした。①と②に対しては、ビジネス、製造会社などの語彙を増やすことである。自分の経験では、会社のISO規格の研修の際に、会社の部署、流れ、品質等に関する問題を多く翻訳・通訳したので、ISO規格関連の語彙を教えれば、どの企業にも応用できると考えた。

しかし、語彙が足りないという問題は実は常にある。特に、フリーランス通訳の仕事を受ける際である。そのため、③に対しては、どの種類のビジネスにでも応用できる語彙、専門の知識が足りず、専門用語が分からない時の迂言的説明に使用できる語彙が必要である。スポーツ用語（監督、サブ、スパーリング等）、医学的用語（動脈、静脈、接種、副作用、持病等）等の専門用語と同時に、語彙が分からない際の回避ストラテジーも考えなければならない。例えば、英語にし、カタカナ語化する方法や、原話者に確認する方法、見えないところでスマートフォンで意味検索する方法等である。④に対して、十分に情報を取得できない場合や、明らかに語彙準備が無理な場合は、状況次第で仕事を断ることも検討すべきである。語彙が分からない場合も、公の場である記者会見の通訳の場合は、辞書やスマートフォンで調べることはできない。さらに、聞き返すことも許されない場合もあるので、迂言的説明に使用できる語彙は必要になる。または、自分が分からない専門用語が多数出てきそうだと想定できる仕事は受けないという方法もある。通訳者のネットワークができたら、誰がどの分野の通訳の専門家になるかは分かってくるので、ふさわしい者に仕事を融通し合うようにすれば、顧客も喜び、自分の精神的な負担も解消できる。

同時通訳の経験からの⑥～⑨に対しては、同時通訳をする前に準備しなければならないことを指導すればよい。例えば、口の動きの練習、よく使われる言葉がすぐ口から出るようにする練習、同時通訳のパートナーの交代練習、資料の準備の練習などである。また、通訳する前の打ち合わせの際に、原話者と相談しておくべき項目を指導する必要もある。

これらの対策項目から、17回分（２回の試験を含む）、各回３時間の予定を次頁の【表１】のように設定した。評価については、通訳者として求められる「広い知識」「自己モニターの習慣」「原言語と目標言語との切り替えの流暢さ」を重視し、語彙テスト、学習者の通訳練習後の自己モニター報告、設定された場面での通訳テストを考えた。語彙テストは小テスト、

表１　2018年度の「日本語通訳」の授業内容

	授業内容		授業内容
週１	理想的な通訳者、道具	週８	直前問題対策；同時通訳；GP6
週２	仲間同士通訳	週９	中間試験
週３	話し言葉の形式・分かりやすい通訳法；仲間同士通訳；GP1	週10	ISO規格；GP7
		週11	通訳の問題を考えよう；GP8
週４	日本語とタイ語の話し言葉の違い；通訳タスク；GP2	週12	ISO規格；訓練紹介：GP9
		週13	職場用語；GP10
週５	数字に関する通訳；GP3	週14	医学用語；外部の通訳者の話
週６	長いスピーチの管理・ノートテイキング；GP4	週15	医学用語
		週16	司会の用語；ST練習
週７	ビデオの通訳；GP5	週17	期末試験

GP＝学習者の好きなテーマの関連用語の発表

中間試験、期末試験に出題した。特に、期末試験では、職場の場面、病院の場面、集会の司会・進行の場面に使用されるタイ語、日本語の語彙力を測る。通訳者は、最初の仕事はミスがあっても当然だが、同じミスを繰り返すことは許されないことから、自己モニターを常にしなければならない。そのため、タスクとして訓練が終わってから報告書を出してもらい、活動の点数として評価した。設定場面の通訳テストの場合は、実際の通訳と同様に、練習後、タスクを課し、３日後通訳をさせた。通訳の際は、どの道具を用意してもよいが、適切かどうかも評価される。通訳ボックスで通訳するような同時通訳の場合は、携帯で言葉を調べてもよいが、時間内に話さなければならない。数字が多い表現には、ノートテイキングして目標言語の単位（「畳」「坪」「センチ」等）に換算するテストも中間試験、期末試験の一部に出した。

活動は、【表１】の四角囲いを付けた４つに分かれる。仲間同士通訳、通訳タスク、同時通訳、外部の通訳者の話である。仲間同士通訳は、一人の学習者が原話者になり体験談をして、もう一人の学習者に逐次通訳をしてもらい、通訳を体験させるものである。通訳タスクは、一般の通訳者と同様に、仕事を頼まれて逐次通訳してもらうものである。例えば、タイ人のボクサーに日本語通訳をすることを頼まれたら、ボクシングについての用語をインターネットで用意しなければならない。教師からは用語を事前に与えないので、語彙が足りなければ、その場で解決方法を考えなければならない。同時通訳は、本大学にある通訳ボックス付きの会議室を利用して、プレゼンテーションを見ながら同時通訳をするものである。また、外部の現役通訳者などを招待して通訳の体験談をしてもらうことも行った。学習者には、通訳を始める際、どのような仕事から始めるべきか判断できないので、体験談を聞くことは、通訳を仕事として始められるようにするために必要な活動である。

３．指導後の自己モニター

早稲田の修士課程の実践科目を受けた時に、仲間同士で「反省会をしましょう」と言っていたのを覚えているが、仲間がいない現場では、一人で自己モニターをしなければなら

ない。通訳の仕事と同様に、指導にあたっても、失敗を繰り返さないためには、どのようにすればよいかという対策方法を考えておくべきである。

まずは、評価方法である。評価の必要がない社会人のコースなら、合格・不合格だけになるが、大学機関では、A／B＋／B／C＋／C／D＋／D／Fの８段階で評価しなければならない。選択科目なので、受講している学生の日本語力が高く、通訳に挑戦できるレベルになっていることから、AからC＋までになるだろうと想定できるが、それでも、判断が難しい。そのため、細かい評価が必要であった。

しかし、指導者にとって最も困難だったのは、通訳した音声ファイルを繰り返し聞き、最初から最後まで評価することである。学習者が多ければ、同じことを何回も繰り返して聞くことは大きな負担である。そのため、試験を設計し直す必要がある。

受講者の評価を見ても、好評とは言えなかった。中には、同時通訳の場合、通訳ボックスに入ったのは初めてで、もう少し体験したいという要望もあった。また、仲間同士の通訳は照れながら話していたので、通訳ごっこのような雰囲気になってしまい、真剣にやっていないという欠点があった。指導者が採点に苦労したことで評価が遅れたため、自己修正することができなかったという問題もあった。外部の通訳者も一名のみで、多様な通訳の種類を知りたい学習者には不十分だった。最後は、教室の問題である。一般の教室は、椅子が移動しやすいため、コミュニカティブ・アプローチは適切だが、仲間同士が接しやすい反面、集中力が下がり、遊び半分のクラスになってしまい、真剣に受講したい学習者には適切ではなかった。ウィスパーリング通訳や逐次通訳の練習には問題がなかったが、テストになる時は受講者の声が聞こえにくいなどの問題が起き、LL（Language Laboratory）室を利用することに変更した。

2019年度に２回目の開講になった。その際、上記の問題に対して対策を行った。中間試験・期末試験の際の通訳テストを２種類にした。聞いてすぐに試験用紙の問題の空所部分を埋めるものと、聞いて通訳するものである。空所部分の情報を聞き取ることは通訳の前の段階だが、書いてもらうものなので、採点しやすい。音声を聞きなおして評価するのは「聞いて通訳するもの」だけになったため、採点の負担が減ってすぐ採点へのフィードバックができるようになった。使用教室も、集中力を高めるために、LL室を頻繁に利用し、受講者にとって好評の通訳ボックスの体験も３回に増やした。同時通訳も怖くなくなったような印象を受けた。真剣に通訳してもらうために、仲間同士通訳をやめ、外部の人を招待してその人の話を訳してもらうことにした。今回は、タイ語ができるラオス人の学習者の話を日本語に訳すタスクと、日本人のゲストの日本語をタイ語に訳すタスクが実行でき、学習者は通訳を実際に体験できたと感じ、高い評価をした。また、外部の通訳者の話を聞く活動も、同じ予算を半分にわけて、２人を招待したことによって、多様性を増やした。

たまたま2020年からはコロナウイルスの感染拡大のため、オンライン形式になり、変更しなければならない点が多かった。その中で、学習者の好評の大学の通訳ボックスの利用ができなくなったため、大学から教室での授業の許可が出ると、すぐに通訳ボックス付きの会議室を予約して体験させた。結果的には２回まで利用できた。３回目の同時通訳はZOOMで行うことになった。通訳の実践体験も高く評価されたため、次の【表２】に示すように、オンラインで日本にいるタイ人にインタビューしながら日本語通訳をするという活動に変更した。通訳を通じて日本に住んでいるタイ人によくある問題についても知ることができ、社会勉強にもなった。また、サイト・トランスレーションは完成した文を見

て訳すものなので、聞いて訳すものより難易度が低いので、最初から練習を増やした。

表２　2020年度の「日本語通訳」の授業内容

	授業内容		授業内容
週１	理想的な通訳者、道具	週９	中間試験
週２	日本語とタイ語の話し言葉の違い	週10	外部の通訳者の話
週３	話し言葉の形式・分かりやすい通訳法；通訳タスク；GP1	週11	同時通訳；GP7
		週12	ISO規格；訓練紹介：GP8
週４	長いスピーチの管理・ノートテイキング；ST練習；GP2	週13	職場用語；GP9
		週14	医学用語；外部の通訳者の話
週５	数字に関する通訳；ST練習；GP3	週15	医学用語；同時通訳
週６	インタビュー・通訳；GP4	週16	司会の用語；ST練習
週７	インタビュー・通訳；GP5	週17	期末試験
週８	直前問題対策；同時通訳；GP6		

GP＝学習者の好きなテーマの関連用語の発表；ST＝サイト・トランスレーション

４．おわりに

以上のように、「日本語通訳」の授業のコースデザインをし、実践しながら、修正してきた。今後も通訳の仕事の内容は変わっていくので、指導の面も完全版はない。最近、日系企業の製造会社がベトナムやフィリピンへ移転しているので、将来製造工程関係は基礎知識として学ぶ必要がなくなると思われる。一方、コンピューターデザインの企業が増えてきており、これらの会社と情報交換して必要な語彙を集めなければならないだろう。指導者本人もできるだけそのような通訳の実践の機会を持てば、指導の際に実際的なアドバイスができるであろう。通訳を教える際に教師が通訳見本を求められることもあり、タスクの参加者の一人になるというパターンも対等的な交流を求める現代の学習者には合うだろう。2021年８月に大学の「日本語通訳」の科目担当者の合同セミナーがあり、そこでも学習者が多い教室の指導法等の様々な情報を得ることができた。CEFR（2020）においても通訳・翻訳という仲介（Mediation）のスキルが言語学習の欠かせない活動と見なされているようで、今後、「日本語通訳」以外に「基礎日本語通訳」などの初級学習者向け科目を工夫する必要が生まれる可能性がある。

参考文献

小松達也（2005）『通訳の技術』研究社
Banchongmanee, B.（2006）ทางลัดสู่ล่ามญี่ปุ่น.（通訳への近道）ภาษาและวัฒนธรรม.
Council of Europe（2020）Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment（CEFR）Companion Volume.（http://www.coe.int/lang-cefr）

（あさだーゆっと　ちゅーしー　チュラーロンコーン大学文学部兼RU-ALLE
（Research Unit - Applied Linguistics for Language Education））